

会長挨拶

藤原 正孝

校名・修道から

修道学園の歴史は、1725年創立の広島藩「講学所」に始まるとされる。途中、「学問所」と改名され、1870年「修道館」と改称され、以来「修道」の名が続いている。

講堂正面両脇には、12代藩主浅野長勲^{こと}筆の一对の書、「率性之謂道」「修道之謂教」が掲げられている。この言葉は、中国の古典四書の一つ、最高の哲学書とされる「中庸」の最も有名な一節、天命之謂性 率性之謂道 修道之謂教からの引用である。三句が一体として崇高な哲学を示している。

ギリシャの哲人ソクラテスと共に有名な「汝みずからを知れ」は、知恵の神アポロンの神殿に掲げられていた言葉で、人類への命題でもある。禅を象徴する言葉も「汝自身を知れ」である。小生は、折に触れ、中庸の一節とこの言葉の意味する所を探ってきた。現在、次のように解釈している。

汝自身を深く探求することによって、天が人間に命じた「性」（すべての人間に生まれながら備わっている人間の本性と、それぞれの人間の個性）を自覚することができる。その「性」に^{したが}率って生きることが「道」。その「道」を習得して実践した足跡が「教」であり、人生の手本である。この足跡をしっかり吟味することが究極の勉強である。「率性之謂道」は、日本古来の「神ながらの道」とほぼ同義で、幸せで愉快的な人生を歩む秘訣である。

今回の同期会名簿には、同期生多数のメッセージが掲載されるとのこと。生意気ながら、縁あって15期会会長の命を受けた小生の最後のメッセージとさせていただきます。参考にでもなればと思います。同期の皆さんのご多幸を心から祈ります。

お盆の同期会に因んで

－この世とあの世－

宇野 正三

我々 15 回卒業生の同期会は、お盆の季節に開催されることが多い。今回は、卒業 40 周年の同期会ということで、恩師も 5 人参加された。懐かしい御方との再会、歓談の宴は、至福のひと時であった。しかし、既に幽明境を異にされた同期生もおられ、心から御冥福をお祈り申し上げる。このお盆の季節に因み、この世とあの世について考えてみたい。

お盆の時節には、先祖の霊＝魂がこの世に帰ってくると信じられ、我々はお墓参りをしたり、僧侶を招いて、お経を上げたりして、先祖供養をする。先祖の魂をあの世へ送って、お盆は終わる。この行事を我々は毎年、疑問なく繰り返しているが、お盆は人間の魂が死後も生き続けているのでなければ成り立たない。お盆もこの死後の魂の幸福を祈る行事である。

それでは、死後の生存はあるのであろうか。これを断言することは出来ない。しかし、死後の生存を否定することも出来ない。私は我々の魂の中に永遠不滅なものがあると考えている。私は、森羅万象は永遠な存在の現れ＝表れであると思う。それは海と波のような関係で、波が森羅万象で海が永遠の存在である。波は海が様々な形態を取った姿で、両者は不一不二の関係にある。この永遠の存在こそ、宗教で神とか仏とか呼んでいる存在である。故に、我々を含めて全ての個々の存在は神仏の現れ＝表れであるから、その根底は永遠界に繋がっている。私は宗教的境地とは、この神仏と自己との一体感であると思う。この一体感が宗教の本質である。この一体感は神仏の存在に気付くことによって生まれ、これが得られると、心は安らかとなる。この安らかさを得ることが、極楽に入ることだと考える。仏教が、悟れば涅槃の境地が得られると説くのは、這般の事情を語っている。

一般に、極楽とは死んでから往く所だと言われている。しかし、我々はこの世において安らかな境地を得ることが可能であり、その意味で極楽には、この世で往くことが出来るのである。死後の世界があるとすれば、我々はこの世での自分の心＝魂をそのままあの世に持って往く筈である。この世で安らかさを得ていない魂は、あの世においてもそうであろう。そうであるなら、心の安らかさを得るため、あの世で修行しなければならぬであろう。しかし、安心の境地を獲得して、極楽に入るのは一日も早い方が良く、この世においてこそ成就すべきものと思われる。

この同期会は誠に愉快的な集いであり、極楽の一つである。このような機会が持てるのも、藤原正孝会長の御努力にも負うが、何と云っても土井和士氏の御功績が大きい。この場をお借りして、心から感謝の意を表したい。

(平成 15 年 8 月 24 日潤筆。)

同期生からのメッセージ

関東地区同期会 15年

元関東地区同期会幹事 岡田 琢司

毎年1月の最終土曜日に開かれるこの会に私が初めて参加した時、どなたかが“あれから四分の一世紀”と卒後25年を強調されていました。今年40周年という事は、東京同窓会も $40 - 25 = 15$ 年以上続いている計算になります。これも幹事の石社君、住所録データをメンテしてくれる土井(和)君、場所を提供してくれる朝村君ら有志諸兄の献身的な協力の賜物です。

5、6年前から先生をお一方ずつ招待する企画がはじまり、辻井、吉崎、街道、林の諸先生から懐かしい話を伺いました。恩師ご列席の年は出席者も多く30人近い参加があります。会が盛り上がって会場を見渡すと、かつての紅顔の美少年たちも頭髪の密度、お腹の出具合においてほとんど同じレベルで、先生と見分けがつかない事に40年の時の流れを思い知らされます。

ここ数年はこれまでの仕事をリタイア、第二、第三の人生を始められる方も多く、中には“これから、株式投資で100億円のファンドを集める”と夢を語る意気軒昂な方もいます。大きな転換期を迎えた我々の今後の生き方についてノーハウ交換の場としても貴重です。みなさん是非ご参加を。

一月曜日から金曜日までは名古屋で働き、

土曜日と日曜日は東京で暮らしているー

奥村 徹

何度も何度も襲って来る病魔をことごとく駆逐されている佐藤先生の話には感動した。

長年広島を留守にしているため、つい、懐かしくて二次会では終わらず静川(中川)の先導で三次会まで行った。みんなで小学唱歌ふるさとを歌ったら、そこにいた者の心が一つになった。呉の兄貴の家に着いたのは2時を回っていた。翌日昼過ぎの新幹線に乗ったが、再会した面々のことに思いを巡らしていたらあっという間に東京に帰っていた。卒業40周年記念同期会に出かけて行って本当によかった。

早く仕事から解放されて、藤原会長のように孫の相手でもしたいものだ。それも広島でできればいいなあ。

帰り道で

柿原 敏明

今もって元気そうな恩師をはじめ、同期の者と飲み交わして大変楽しい一時でした。年と共に、風貌は少し変わったけど、徐々に「あの時」の彼に間違いのない

と確信が持てる様になり、まさに「タイムスリップ」した感慨深い思いでした。

そして、誰々が現在療養中とか、帰らぬ人となった話がでるにつけ、次回もお互いに元気で再会したいものだと、帰り道つくづく思った次第です。

昔の映画の一こま

国光(旧姓 岡本)栄介

先日の久し振りの同期会は本当に楽しい一時でした。3～6年間一緒だと半分近くは良く知っており、昔の事、現在の状況、家族のこと等を話合ううちに時間が足りなくなる状況でした。

特に長い間会っていなかった友達とは年数を追っての話となりました。今思い出しても中高校時代のお互いのバカさ加減に呆れるやら、又、妙にそういう事がお互いに印象深く残っている事に感動したりと充実した思い出話に花が咲きました。

その中でも20数年振りに会ったO君とは中学時代は席順も前と後という関係で親しく、毎週ように土曜日の午後は安い洋画専門館に通った懐かしい話となり、「自慢じゃないけど殆どの西部劇は観たな」と感心しきりでした。

その内その時の5組の連中も集まり、また話が盛り上がりお互いに悪いクラスにいたものだと。自分が悪いのか、たまたま悪いクラスにいたから悪くなったのだとの擦り合いになりました。そして早めに退職された担任の大池先生に迷惑を掛けたなど反省する始末。その内大池先生を呼んで中学5組のクラス会もやろう言う話も出て、傍に居られた先生生徒一同大いに話が盛り上がった一夜でした。

青春時代とは良く言ったもの。その時代を修道というむさ苦しい男子校で先生に反撥したり、汗一杯のサッカーをしたり、時には議論をし喧嘩もしたりしました。今の時代と違う濃密な人間関係を築いた日々を反芻しながら、皆に再会出来た事をととても嬉しく思いました。

それから、その日に来られた恩師の近況の話があり、病気をおして特に我々15回生の為に出て来られた先生、現在老後の生き生きとしたユニークな生活振りに夫々感銘を受け、それなどを参考に私たちの来し方行く末を考え充実した生活にしたいと思った次第です。

今回は関東関西の遠来組が少なく多少残念ではありました。ともあれ懐かしい昔の映画の一こまを観た思いです。

又次回を楽しみに元気で頑張りましょう。

雑感

静川(旧姓 中川)周

いざ、思い出を書こうとすると、40年以上前のこととなるので、記憶が曖昧となっている。高一になって、“ちょっと泳げる”ことだけで、喜連に誘われ、土井(一

彦)と一緒に水泳部に入り、水球を始めた。たいして才能がなかったが、何とか格好をつけたような感じであった。喜連、渡辺(敏)、土井なんかには、迷惑の掛けどうしだったが、インターハイ、国体に行けたのは、男子校で、おまけに“シャイ”な性格が災いし、女子高生に声を掛けることができなかつた暗い青春に、せめてもの思い出であった。映画“ウォーターボーイズ”の主役は、もてたが、こっちは映画の脇役と同じで、もてない役どころで一抔の寂しさが残るがしかたがない。

水球をするようになったのも高一の夏に中一の臨海学校の手伝いをしたのがきっかけである。その時に面倒をみた後輩の赤羽氏と今年の春に地場で現在唯一の西日本監査法人を立ち上げたのも何かの縁というものであろう。

恩師の言葉

新宅 博明

はじめに、土井和士君には、長年に亙り会のお世話をいただき感謝に絶えません。会の隆盛は事務局長の熱意次第であることを改めて感じ入っています。

さて、修道時代には二人の先生の言葉が今も残っています。佐藤先生の授業で、因数分解の解答を順に前に出て書く時、宿題をやっていない私は書けませんでした。一言「わかっとるんならええがのー」。高一のとき、赤い靴下を履いて階段を上がっていると、追い越していく林先生が、「勉強が分からんと、このようなものをはきだすんよの」と、そして、高二の進路面接のとき、受験校の名前を挙げたら「話しにならんの」でした。

遊びで思い出すのは、中学3年時の3人での四国旅行を、そして高校一年のスキー合宿でしょうか。今これらが無性に懐かしいです。

小さな目標

武田 洋征

来年は還暦、年月の経過は早く諺を噛み締めています。

私たちの育った時代は高度成長期で大きな夢を持ってがんばっていたような気がします。

第一の会社を転籍退社し第二の会社に身を置く現在、規制緩和・コスト削減等の厳しい時代になりましたが、会社を健全に存続させていくことが私の仕事です。

小さな目標ですが、若き日と変わらない気持ちでがんばっています。

あの頃

世良 伸武

照りつける陽射しの中、わずかな休憩時間を貪るように球技に興じる囚人達・アメリカ映画で偶に目にするシーンだが、妙に懐かしく、あの頃の映像とダブってくる。

蜂の子散らす昼休みの校庭。いくつものボールが入り乱れてゴールをめざす。危険がいっぱいのゲームだが、ベルが鳴るまでは誰も抜けない。

花一輪見当たらない殺風景な教室。白壁のそこここにくっきりとボールの洗礼。教師が来るまで時間があればパスを繰り返す。

夜通し走ったバス応援ツアー。窓に映る真剣な顔、顔、顔。ラジオからコニー・フランシスの「♪夢のデート」。みんなで燃えあがったなあ、西宮球技場。堪らなくサッカーが好きで、みんながサッカーを通してひとつになった。

色褪せることない青春の日々・・・。



同期会開催前夜の想い

竹中 敬宗

同期会の開催が明日となった。会に出席するのは 10 年ぶりであろうか。案内を貰って、懐かしい思い出と共に若き日の友の顔が浮かんでくる。

卒業以来一度も会っていない友人も大勢いる。高田馬場の旅館で別れて以来会っていない I 君はどうしているのだろうか。随分前に新聞の異動欄で一度名前を見かけた W 君は元気だろうか。T 君は同期会で一度会ったがそれっきりになってしまった、彼らは今回出席するのであるだろうか等々思いは募る。

頭の白くなった人、薄くなった人、貫禄のでた人、とさまざまであるが、名前を聞くまでは当時の顔と一致しない人もいると思う。楽しみである。この機に思い出を辿り、昔話に花を咲かせたいものである。

高校卒業から 40 年、来年は還暦、サラリーマンは定年の歳である。我々の世代はデフレ時代の煽りを受けて、現役最終局面では苦労を余儀なくされる事となった。

昔は良かった、学生時代が華だったと思うのは歳をとったせいであろうか。バスケットボールに明け暮れ、春・夏・冬の合宿、遠征、そして女学院との合同練習・ハイキング、すべて青春時代の良き思い出である。

私は 1 年前に現役を引退して、野菜作りに精を出す毎日である。残された人生は晴耕雨読、気ままに過ごしたいと願っている。

最後に、いつも面倒な作業をやって頂く幹事の皆様に感謝します。

修道時代の思い出

中下 司

10 代半ばの 6 年間、随分昔のことになる。夢も、憧れも、悲しみもたっぷりあった多感な時代であった。当時私は、江田島町から通学していたが、瀬戸内野球少年団びったしの野球大好き少年であり、修道生としては不謹慎とも言えるのであろうが、サッカーの球など蹴った記憶がほとんどない。

遠距離通学の為に僅か 1 学期間で野球部をやめたのが一番悔しい思い出である。そ

んな訳で勉強は嫌いなほうで、要領よくやる事ばかり求めて逃げてばかりいた気がする。只、いまにして一番良かったとありがたく思うのは、やはり勉強に関することである。

中学3年間の担任であった国語の街道先生が、中学3年生か高校1年生の頃であったと思うが、授業とはまったく関係なく「哲学の話」、「倫理の話」という姉妹版の単行本を生徒全員に買わせて勧められた。

これが私にとっては当時から30歳くらいまでまったく難解で歯がたたなかった。意地になって何回かの転居の際も、セピア色になった本が捨てられず、何度目かの挑戦で読了だけはした。

これが縁で、若い時からの恥ずかしいくらいの読書嫌いから脱出できて何とか現在、読書が趣味と言えるようになった。私には望外の喜びであり、恩師の深慮遠謀に感謝している。

河を渡って

中村 正人

「編入生」として高一から下宿生活に入りました。夏の蒸し暑さと冬の冷たさ、そして、空腹だった事だけが思い出され、勉学に励んでいる情景が一向に思い浮かばないのが不思議です。

あれから40年。とうとう五十路最期の秋を迎えてしまいました。早いものです。同期会の案内を頂きながら、参加できず残念至極です。今、来し方40年を振り返りつつ、時代を共に歩んできた同輩諸兄の顔一顔一顔を思い出し、懐かしさの中で幾許かの感傷に浸っているところです。

「河を渡って木立ちの中へ」。アメリカ南北戦争、南軍リー將軍の言葉です。「河」は今日も続く戦いです。苦しいけれども避けることは出来ません。向こうに木立ちが見えます。早く戦いを終え、木立ちの下で襟元を緩め、涼風に身を委ねたいと云う思いに駆られたりもします。只、撤退するには早すぎます。心残りもあります。余力もまだまだです。

修道健児のあの頃の意気と馬力は望むべくもありませんが、残された日は、せめて、心穏やかに、そして此処一番では敢然と立ち上がる気概も内に秘めつつ……。同輩諸兄よ！見事、激流を渡り切って行こうではありませんか。

又、何時の日か、笑顔でお会いできる日を楽しみに。

懐かしく感激

畑口 隆昭

小生は40年振りに級友に会い、恩師にお目に掛かり、段原日の出町の寄宿舍で勉強する振りをして眠ったことや、街道先生が熱心にご指導して下さった事など懐かしく思いました。

少年期の純粋な情熱で学んだことが今日迄の人生航路を無事に歩めた理由だと

思い至り、懐かしく感激した。

私事ですが、小生韓国で工場経営をしております。どうぞこちらへお越しの折はご連絡下さい。

同期生皆様のご健勝をいのる。

同期はよき仲間

藤原 克祥

同期はよき仲間と思う。

会えば飾ることなく自然に昔の若者時代に戻る。

風貌は人それぞれ変化し昔からは想像できない奴もいる。

「お前、誰じゃったかいの一」と広島弁。同期だからこそ言える言葉と思う。

今年は残念ながら同期会へ参加できなかったけど、何時までも元気で参加したいものである。

「汽車通」考

松本 成比

「沈香（じんこう）も焚（た）かず屁（へ）もひらず、ではいけない」と、新聞記者の先輩によく言われた。性格も手伝って、子ども時代からそれなりに「個性的」に、定年間近までがんばってきたが、どう考えても高校3年間は「焚かず、ひらず」だった。同期会があっても、なかなか恩師に駆け寄ることができない。手も焼かせなかったが成績の覚えもめでたくない、教室の隅のひっそりした自分が甦るからだ。

あこがれの修道の、高校編入があればどしんどいものとは、考えてもみななかった。朝、暗いうちに蒸気機関車の列車に乗る。時には車内で顔を洗って、朝の補習で数Ⅰやって正規の1時限目は数Ⅱ。午後また補習があって、列車が駅に着くととっぷり暮れていた。そんな1年間で、体力・気力、自尊心が木っ端みじんだった。

だが、「社会部記者になる」夢が支えた。当時は学卒が入社要件だった。地味ながら学費の安い北九州の公立で親孝行、高校の反動からか、旗ばかり振っていたが、NHKテレビ「事件記者」に影響された中学時代からの念願は果たした。

学生から社会人へ、新聞からテレビへと九州に根を生やし、同期会だ、里帰りだと「汽車通」する都度、山陽線の列車は明るくなった。電化、民営化などの環境変化の結果だが、年を重ねるごとに、同期会に出る度に母校への懐かしさと誇りが増すのを実感しながら、あの、すすけた木造客車のほの暗い丸電灯が、妙に切なく懐かしい。

思い出・教訓・感謝

光村 哲也

思い出

中学時代、担任の東先生が部長の社会班に入部。先輩の高校生が夏休みになると一週間程度の県外旅行に出かけるのが羨ましかった。高校生になったら「絶対

に旅行するぞ」と思いながら、同級生7人ともっぱら休日を利用して広島市の周辺をよくサイクリングして廻ったものだ。

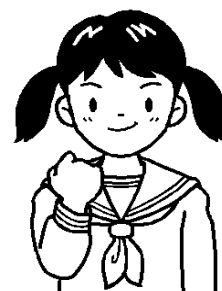
ようやく高校一年になった夏休み、東先生引率のもと、奥田、加藤、直原、船本、谷口、玉井と共に1960年夏の盛り、大分県は国東半島の先に浮かぶ「姫島」へ調査旅行へでかけた。

十分な予備知識をもっていなかったので島に着いてびっくり。小さな島全体が旧火山のデパートであった。コニーデ型の矢筈岳（姫島富士）、カルデラ状の城山と達摩山、その他にも炭酸泉の湧く拍子水、断崖が黒曜石で被われた観音崎付近等々の探検、役場での産業調査、年配の人の講話、船釣り等々の楽しい思い出と共に旅行を終えることができた。

学校卒業後、あのすばらしき「姫島」の思い出が年々と頭の中をよぎり、いつかあの感動をもう一度と求めてきた。ようやく2000年夏、40年ぶりに姫島を訪問できた。

教訓

40年ぶりの訪問は私自身浦島太郎になった気分であった。しかし、現実には港に着いた所から、「これは思い出の姫島ではない。あの時は自然のままの風景と気のいい人々しか出会わなかったのに」と思い始めた。せめても慰めは毎晩夕涼みがてら、東先生に連れて行ってもらった氷屋の可愛い娘さんに出会わなかったことでした。あえばきっと……。すばらしい思い出は思い出として残し、もう一度などと欲張らないことです。



感謝

人との縁は不思議なものだと常々感じています。そうした縁で辻井先生、東先生、吉崎先生には特に在学中お世話になりました。そして卒業後も、いつも何かと気にかけていただき感謝の念でいっぱいです。

また、いつも同期会の面倒をみてくれる幹事の皆さん、ありがとう。

思い出

峰崎 直樹

なんと言う厳しい高等学校であるのか、入学式を前に思い知らされた。高等学校への編入試験に無事合格した喜びもつかの間、すでに中学からのメンバーでは終えている高等学校1年生の数学と英語の補修授業に入ったのである。それからの1年間というものはまさに受験地獄、いかに自分が中学校から上がってきた仲間から遅れているのか、5月に入って実施された実力テストで思い知らされることとなる。なんと400数十人中400番台という結果なのである。これはひどいところに来てしまった。でももう遅い。何とか努力して追いつく以外にないがそれにしても追いつくあてはあるのだろうか。自問しつつも授業だけは猛スピードで進んでいく。呉から汽車で通っているため朝は5時30分ぐらいには起床し市電で阿賀駅に、それから汽車に乗って広島駅へ、そこから市電で御幸橋へ実に2時間近い通学時間は痛い。時には机に向かって眠りコケそのまま朝を迎えたと

きもあった。幸い家庭の事情で一年生の夏休みに府中町に転居し赤バスで30分という地の利に恵まれようやくペースが上がり始めたのもつかの間、2年生の夏休みから生来の神経質な性格が災いしたのか、十二指腸潰瘍にやられ（先日実施した内視鏡検査ではケロイドが無くなりようやくその痕跡が姿を消していた）芸備線沿線の胃腸病院に毎週日曜日に1年近く通り何とか回復するという体たらくで、それだけを考えてと高校時代の印象はまことに寂しい。ましてや男女共学ではないのであり、こんな生活は二度としたくない、というのが今もっての偽らざる気持ちである。

しかしながら振り返ってみればよき先生やよき友を得たのも間違いない。それぞれの授業に対する先生方の熱意には今振り返っても持てるエネルギーのすべてを投げかけておられたし、生徒の将来に対する暖かい配慮には頭が下がる。授業中のやり取りの中には時にユーモラスな雰囲気を含んだものが多く、とりわけ中学からの師弟関係の長い生徒に対する繋がり深さに「ここは家族的な雰囲気があるのだな」と感じ入ったこともしばしばであった。友人関係ではともすれば受験によって狭くなりがちであったがこの国の将来に対する漠然とした思い入れに共鳴しつつ、おのおのが主体的に自分の志望する大学を選択し、社会人としてのそれぞれの道を歩んできた40年なのだと思う。それにしてもこの40年という歳月は長い。その間の思い出の中には生活と仕事の拠点が北海道であるがゆえに記憶がかすみ始めていることも間違いない。でも、わずか3年間という高校時代の体験が持つ重みは大きい。あらためて修道健児であったことに誇りと感謝する次第である。

高校時代の思い出

山根 康弘

私の高校時代は残念ながら殆んど楽しかった思い出は有りません。ガールフレンドがいるわけでもなく、成績もかんばしくなく、部活で活躍するでもなく、無い無いづくしの毎日だった様に思います。ただ少ない友達との交流、ジャンルを問わない映画鑑賞、読書等で過ごす全く暗く怠惰な毎日でした。

その反動が出て大学に入ってからからは勉学はそこのけで、遊びほうけ卒業に5年かかりました。

大学を卒業してサラリーマンとなり20年くらい広島を離れ、その間修道の同期とは殆んど交流のない日々が続いていましたが、16年前家庭の事情で広島へ帰ってからは、中学、高校時代の友達との交流も次第に多くなり、同期会には可能な限り出席するようになり成りました。

また最近開催が無くなりましたが、建設部会にも良く出たものです。

昨年、あるきっかけで同級生の宮本寛治君と「ヒロシマ祭り」と称し8月6日に平和コンサートを開くことに成り、同級生各位には大変な迷惑をかけ、多くのご助力を頂き同級生のありがたさと修道生のパワーを実感しています。

還暦に近くなった現在、出来るだけ健康で、楽しいことに沢山めぐり合い、やりたいことはすぐ実行し続ける人生にしたいと思っています。

同級生諸君、いつまでも夢を持ち少年の心を持った、わがままな不良壮年をやり続けましょう。

編集後記

日月のゆくのは、まことに早く、私たちも還暦が目睫の間に迫って参りました。本当に若いときは束の間に過ぎ去り、「少壯能ク幾時ゾ」という思いがします。そのためか今回の同期会の準備に、最初はかつてほどの元気がでませんでした。しかし準備していくうちに、「今までとは違った同期会にしよう」という気が湧いてきました。

私たちが今生きている「情報」化社会を考えてみると、実際は「報」のみの社会で、「情」の伝わってこない社会のような気がしてきました。そして、こうした社会であればこそ、私たちの同期会は、「情」をも伝えられる同期会にしたいものだと思い始めました。

そのため急遽、同期生のメッセージを募りました。当初から計画したことではなかったので、同期会出席予定者と名簿購入者のなかで、メールアドレスの分かっている方々に、それをお願いしました。ご協力くださった方々に心からお礼を申し上げます。そのメッセージの中に、小生にとって面映ゆい箇所もありましたが、筆者の意に感謝し尊重して、そのままを載せました。

メッセージに加え、同期会に出席できなかった方々に、同期会の様子を伝えるための「同期会報告書」も作りました。話された言葉の文章化は難しいものがあり、話された方々の真意を正しく伝えられない箇所もあるだろうとお詫びいたします。

特に田中先生の日のご挨拶は諧謔に富み、私たちのこれからの生き方に大いに参考になる内容でした。しかし先生は、これを漫談的だと恥ずかしがられ、後から少し内容の違う文章に差し換えられました。小生としては、とても残念ですが、恩師に逆らうわけにもいきませんので、仕方なく先生のいわれるようにしました。

なお、「同期会報告書」を作るとき、竹中敬宗君に大いに助けられました。彼の協力がなければ、「同期会報告書」を作ることはできませんでした。この紙面を借りて、彼に心から感謝の意を表します。

思えば私たちはこの半世紀くらい、時間という狭い基軸の線上を物質的な豊かさを求めて、ただひたすら駆け抜けて来たように思います。これからは心の豊かさを求め、奥行きと広がりのある心の空間の中を自由に生きていきたいものだと願っています。

しかし、そうした生き方は一人だけではできません。同期会を通し、友情の輪を広げていく中で、できるように思います。ついては、今後とも同期会活動にご協力を下さいますようお願いいたします。

古人曰く、「新知ヲ結ブハ、旧好（旧交）ヲ敦クスルニ如カズ」と。

平成15年 秋

〒731-5127 広島市佐伯区五日市4-2-6
修道高等学校第15回卒業生同期会
事務局 土井 和士
TEL.082-921-1024 FAX.082-921-5039